

今日の資本主義が利子生み資本形態をとって運動する歴大な架空資本であることに対する直観的・即自的な理解と批判が、対象を金融資本主義として措定した種々の議論だといえる。その端的な事例は、「強欲資本主義」「マネーの暴走」などといった倫理的かつ修辭的な「批判」である。こうした議論の一切は、利子生み資本・架空資本という概念をもたないため底の浅いものとしてしか登場しえない。それらの多くが、「現物経済」——現実資本の運動を主とする「健全な資本主義」——を展望し、過去への「回帰」を夢想するのは、架空資本の現実的運動から目を背けているからである。

そしてこれらの議論の一部は、欧米中心主義を脱して「グローバルな状況」を押さえようとし、そのさいに「利子を禁止する金融」としてのイスラーム金融に想いを寄せるようになっている（ムハンマド・バーキルツ＝サドル、黒田壽郎・岩井聡訳『イスラーム経済論』、未知谷、1993年；同『無利子銀行論』、未知谷、1994年）。では、イスラーム金融はいかなるものなのか？

1960年代半ば、マクシム・ロダンソンは、「イデオロギーとしてのイスラーム」＝「経済的後進性の原因」なるレイシスト定式をすでに批判していた。しかしながら、ロダンソンの資本主義原像は決定的にフランスのマルクス主義によるバイアスがかかった「産業資本主義」であり、われわれにとっては歴史的古典としての意味はあっても、現在のイスラーム金融の解明にはほとんど役に立たない（Rodinson, Maxim, *Islam et capitalism*, Paris, Seuil, 1966.）。

イスラーム金融が、現下のグローバル金融資本主義において不可欠の構成要素となっていることについては、言を俟たない——この事実をまず確認しておかねばならない。だがそうであるなら、なぜイスラーム金融に期待を寄せる論者が引きも切らずに出現するのか？ それには、非イスラーム社会における金融危機と比較して、イスラーム社会のそれは相対的に軽度であったという事実が存在するからである。

2009年11月にアラブ首長国連邦の一角をなすドゥバイ政府が引き起こした金融不安＝「ドゥバイ・ショック」が、石油産出を背景としたアブダビ政府の即応的援助によって債務不履行回避に落ち着いた過程がその代表例である。このことは、イスラーム金融への期待を高める役割を果たした。さらに同時期が、サブプライム・ローン問題(2007年3月)からリーマン・ショック(2008年9月)へと悪螺旋を描くことで、金融商品価格の「予想変動率」という意味で用いられていた volatility という語の原義である「不安定さ」「揮発(するような揺らぎ)」の脆弱性を、欧米金融業界が露出させたときでもあった。こうした欧米における金融の脆弱性に対して、イスラーム金融は「危機に強い」というイメージを投機的資本家を含む多くの投資家が抱いたのであった。

ではイスラーム金融とは何なのか、利子を禁止するとは一体どういうことなのか、われわれの基本的な考えを簡単に述べておきたい。

イスラーム社会における経済活動が、イスラーム法学＝神学の原理で日常生活規範たる「シャリーア sharia(h)」に適格的でなければならないことは周知の事実である(両角吉章『イスラーム法における信用と「利息」禁止』、羽鳥書店、2011年、55-69ページ)。

ここではまず、イスラーム法学を非理知的と決めつけ、自文化中心主義あるいはオリエンタリズムをア・プリオリに前提とする論調に、みごとな批判を展開しているイスラーム法理論研究者ワイル・ハッラクの論をイスラーム金融を考える基調として踏まえておこう。ハッラクによる1984年公開の記念碑的論文「イジュティハードの門は閉じたのか？」

(“Was the Gate of *Ijtihad* Closed?”, *International Journal of Middle East Studies*, Vol.16, No.1, 1984, pp.3-41.; 奥田敦編訳『イジュティハードの門は閉じたのか』、慶應義塾大学出版会、2003年、3～71ページ)での主張は、こうである。「イジュティハード」とは「神の法を発見するために…(中略)…【イスラーム——著者】法律家が払う最大限の努力である」(ibid., p.3; 邦訳3ページ)。イスラームの法律家たちは劇的に変容を遂げていく世界の中でイジュティハードに努め、日常生活規範たるシャリーアに適格する途を探ってきたのである。

冷戦構造が崩壊し資本主義が凱歌を揚げたとされた1990年代初頭以降、シャリーアに全面適格するイスラーム社会の経済活動の様態の探究は困難を増したであろう。なぜならば、それらの活動の支配的な領域が——たとえ、経済活動が現実の生産物と結び付いている、換言すれば、「現物経済」すなわち現実資本の運動と密接に関連していても——、運動の金融という架空資本の運動の場に置かれるようになったからにはほかならない。

付言しておかなければならないのは、イスラーム金融を互酬性に重きを置く「贈与と交換の共存」と捉える観点に、われわれは一切与しない、ということである。たとえば櫻井秀子は個人の次元での「信頼と関係性の保持」を下敷きとした「贈与と交換の混交市場」としてイスラーム金融を描こうとする(櫻井『イスラーム金融——贈与と交換、その共存のシステムを解く』(新評論、2008年))。経済人類学者カール・ポランニーの「経済人 Homo Economicus」的市場観に対する批判(たとえば福田邦夫・池田昭光・東風谷太一・佐久間寛訳『経済と文明——文明の転換』(ちくま学芸文庫、2015年)の第1部を見よ)ときわめて似通った櫻井の考察は、「現代イスラーム金融システム」の起点を1840年代に求めている(1847年のオスマン帝国によるコンスタンティノープル銀行設立)。

しかし櫻井は、決済中心・通貨原理主義的になっているグローバル金融市場をつうじてもたらされる、歴大な——現世には現存しえない額の——利子をめぐって、イスラーム金融がシャリーア適格の途を必死になって求めていることを理解していない。とくに彼女の議論では、ドルが変動相場制に移行することで金兌換停止を宣言したいわゆる「第1次ニクソン・ショック」の行き先が金融資本市場の決定的な変貌であること、つまり、シカゴ・マーカンタイル取引所の大車輪のごとき活躍によって金融市場が決定的に架空資本の運動の場に変貌を遂げたことなどは、第1次・第2次石油危機(1973年/1979年)という表層の政治的出来事に目を眩まされて、思考の外へと完全に追いやられてしまっている。

櫻井は19世紀中葉の起点と並べて、1981年サウディアラビアによるイスラーム資産信託本部のジュネーヴでの設置を「国際市場におけるイスラーム資金の運用を可能にした」(櫻井同上書、108ページ)とのみ述べているが、ジュネーヴに本部を設置するというその判断

の「資本主義的正しさ」は、〈ニューヨーク - ロンドン - 東京〉を結ぶオフショア（金融）市場の創設をつうじて、一日 24 時間、一瞬の寸断もなくマネーが取引される場が誕生したという事態があってこそ可能であった。

世界最大の投資持株会社バークシャー・ハサウェイの筆頭株主兼 CEO であるウォーレン・バフェットの投資姿勢に似通った行動をとるがゆえに、「アラブのバフェット」なる渾名を『タイム』誌から付けられた、サ우드王家のアル=ワリード・ビン・タラール・ビン・アブドゥルアズィーズ・アール・サ우드王子の位置は、まさにイスラーム金融の賜物である (Kahn, Riz, *Alwaleed: Businessman, Billionaire, Prince*, London, William Morrow, 2005.)。自らがほぼすべてを仕切っている公的持株会社キングダム・ホールディング・カンパニーをつうじて、彼は Amazon.com、アップル、シティ・グループ、コカ・コーラ、ディズニー、eBay、ニュース・コーポレーション、Twitter 等に継続的に投資している。2013 年時点で個人所有の純資産 23 億ドルとされるアル=ワリード・ビン・タラール王子の経歴は、まさにイスラーム金融の上げ潮に乗って歴大なマネーを獲得した、現代の『アラビアン・ナイト』的成功譚と言えよう (Russel, Jesse, & Ronald Cohn, *Al-Waleed bin Talal*, Books on Demand, 2013.)。1980 年代に急速に投資家としての頭角を表した彼の存在こそ、サ우드王家が一大投資マシンとして機能しているという事実の端的な表現である。

こうした歴史的変化を察知せずに 1847 年と 1981 年を直接に結びつける考えは、極端に言えば、古代ギリシャのミレトス学派の創始者タレスにまつわるよく知られたエピソードと同質である。そのエピソードとは、タレスが今でいう先物取引を指導してみせたというものだが、そのことをもって先物取引の起点であるかのように捉えて現代まで連続的・通貫的歴史性を主張することはできない。資本主義は社会を変えた。そして資本主義社会自体もその世界化が惑星大のものとなるにつれ、自己変態を遂げたのである。

そして、この決定的変態の力はイスラーム社会を例外としなかった。そればかりか自らの駆動力に組み込んでいった。今や架空資本（利子生み資本形態での資本様態）の運動が支配するグローバル資本主義の下に、グローバルという形容詞がいみじくも表現しているように、この惑星上の経済生活総体が置かれたことをもって、新たな歴史的段階をイスラーム社会を含めた地上のすべての人間が経験させられているのである。

2012 年という近年に刊行されたにも関わらず、今やすでに古典としての評価が定まったクレイグ・R・ネザーコットとデイヴィッド・M・アイゼンバーグの編になる『イスラーム金融』 (Nethercott, Craig R., & David Eisenberg (eds.), *Islamic Finance: Law and Practice*, Oxford, U.K., 2012.) は、「イスラーム金融の進化” The Evolution of Islamic Finance”」なる第 1 章の冒頭節で、イスラーム金融の時期区分を①初期（1974～1991 年）、②グローバリゼーション期（1991～2001 年）、③ポスト 9・11 期（2001 年以降）としている (*ibid.*, p. 2; 1.05.)。

政治的事件（出来事）を区分の契機とする観点に対して、われわれは完全には同意できない。政治的事件が契機となって時期的展開が生じたのか、すでに潜勢的に準備され成熟していた力が表出したのか、と問われれば、後者の醸成があってこそ前者の表出が可能であったと、われわれは考えるからである。とはいえ、ネザーコットらの区分は便宜的なものとしては受容できるものではある。

しかし、この「古典」においてさえ、実践家の関心が濃い影を落としたのであろうか、金融市場のメカニズムや質的進展は考察の対象に入れられていない。イスラーム金融に関わる実践家が求める種々の「技法」は「倫理的に厳格なリスクヘッジ」の亜種としての「シャリーア適格」の方策として詳述されているが、イスラーム金融そのもののシステムとメカニズム、さらに次々と新たな問題が生じてくる様態の「質的解剖」はなく、現象の叙述に終始しているのである。

さて、イスラーム金融のもっとも際立った特徴とされているのが、利子（リバー ribā）の禁止である。

イスラーム金融において利子が禁止されるのは、利子が「労働に基づかないもの」・「不労所得」とみなされるからであり、黒田壽郎の言に従えば、イスラーム教の教義であるタウヒードの理論、すなわち〈一化〉の理論に根底的に反すると考えられるためである。利子が生み出されることは〈一〉が〈多〉に転化することと判断されるわけである（黒田『イスラームの構造——タウヒード・シャリーア・ウンマ』、書肆心水、2004年）。だがここで、イスラームにおける労働は、相当に広く曖昧な概念であり、また、利子（リバー）それ自体が、ヨーロッパにおける利子（interest）・高利（usury）という法理的には元本債権から派生するものとして捉えられるものよりも理念的に広義に捉えられている点に目を向ける必要がある。結論を要約すれば、「取引における対価がそなえる等価性を逸脱するもの」が「リバー」と呼ばれ、包括的に禁じられるべきものと措かれるのである（両角前掲書）。

だがそもそも、イスラームの教義は商業を容認し、広くとられた労働に基づく利得・利潤もまた認めている。つまり、商品生産—資本主義的生産は認めているのである。かくして、逸脱してはならない日常生活規範（シャリーア）—タウヒードの理論と適格するように利子生み資本の運動をいかにして認めるのか、が問題になるわけである。小杉泰がいみじくも述べるように、イスラームの教義体系に経済行為が主要なメタファーとして用いられている、すなわち経済が宗教（普遍宗教であり生活戒律でもある）に入れ子構造のように組み込まれているのである（小杉泰『現代イスラーム世界論』、名古屋大学出版会、2006年）。じっさい、理念と現実の衝突は、イスラーム金融機関会計監査機関（AAOIFI）やシャリーア諮問評議会（シャリーア・ボード）などの金融諸機関において、現実主義的リバー限定容認論と理念主義的利子＝リバー否定論とが相半ばする状況として現われていると、気鋭のイスラーム研究者・長岡慎介は述べている（長岡『現代イスラーム金融論』、2011年、名古屋大学出版会、2011年、第2・3章）。さらに長岡はカール・ポランニーの言葉を転用して、イスラーム金融を「現物経済に埋め込まれた金融システム」と表現し、現代においては金融手法の「序列化」と「重層化」によって、信用創造をリバー禁止にできるかぎり抵触せずに可能にしていると述べている（長岡同上書、200-214ページ）。

こうしてイスラーム金融なるものは、今日、資本主義的にもっとも有望な成長株の一つとみなされているのである。吉田悦章によれば、イスラーム金融の銀行資産は、この10年間で平均34%の伸び率となっている（吉田『イスラーム金融はなぜ強い』、光文社新書、2008年、34ページ）。こうした銀行資産のきわめて高率な増殖が、たとえリバーと呼ばれなくとも、元本に対する利子以外の何からもたらされるのか？ ムスリムたちの預貯金が年々歳々銀行資産の伸び率に利している、現実資本にものごとを求める限り、このような事態は決して生じない。

H. - G. ベーアは「イスラームは宗教というよりもむしろ、史上初の巨大コンツェルンの定款である」と述べているが、それはこの普遍宗教の歴史を鑑みれば、みごとに正鵠を射ている(ハンス・ゲオルク・ベール、金森誠也訳『最古の「巨大コンツェルン」神話：商業帝国イスラームの謎』、2001年、153ページ; Behr, Hans-Georg, *Söhne der Wüste. Kalifen, Händler und Gelehrte*, Wien/Düsseldorf, Econ Verlag, 1975, S.82.)。しかし今やこの惑星上の金融状況は、巨大コンツェルンが到達しうる範囲をはるかに凌駕してしまった。ところが、ベーアとほとんど変わらぬ地平の上で長岡慎介と小杉泰は、イスラーム金融システムあるいはイスラーム銀行を、欧米金融システムを相対化し、より望ましいオルタナティブを提示するものと評価する(小杉泰・長岡慎介『イスラーム銀行』、山川出版社、2010年、107-114ページ)。だがしかし、その「根拠」は、①西洋中心主義を対象化してグローバルに問題をとらえなければならない、という時代的要請、②サブプライム・ローンからリーマン・ショックに至る悪影響の規模が、欧米の金融機関と比較して相対的に小さかったという結果論、の二つであるにすぎない。①はグローバル金融市場の解明に必要なものではあるが、欧米金融と比較するという視座に束縛される限り、イスラーム金融は「棲み分け」の問題に切り縮められ、グローバルなレベルからする理論的解明のための内在性を欠落させている。さらに②については、悪影響が同じく相対的に小さかった南アフリカ共和国や中華人民共和国などの新興金融経済との比較がなされておらず、イスラーム研究者によるお手盛りの賛美に墮してしまっている。現実データの比較分析を欠いた賞賛は、イスラーム金融を解明する理論に結実しないばかりか、グローバル金融システム内に占めるイスラーム金融システムが有するトランスナショナルな位置づけの曖昧化以外の結果につながらない。

さらに、欧米ほどとは言えないにしても、やはり金融危機の悪影響を被ったことは、比較しようが相対化しようが、まぎれもない事実なのである。

さらにコモディティ・ファイナンスのイスラーム版ともいえる「コモディティ・ムラーバハ commodity *murābahah*」の登場(2009年第4四半期における、「コモディティ・ムラーバハ」を介した英国資本の短期銀行間貸付および協調融資 syndicated loans のマネー・フローは、他のいかなる金融機関にもまして大規模であった。Ercanbrack, Jonathan, *The Transformation of Islamic Law in Global Financial Markets*, Cambridge, U.K., Cambridge University Press, 2015, p.144.; Oakely, David, “London Leads in Race to Be Western Hub”, *Financial Times*, December 7, 2009, p.4. )、金融商品のシャリーア適格の査定と格付けを行なう「株式会社」がイスラーム世界の只中に次々と設立されてきている。

くわえて、イスラーム金融における金融デリヴァティブの存在を指摘しておかなければならない。金融デリヴァティブをどのようにシャリーア適格なものとするのか、という議論は、資本所有者あるいは貨幣資本を貸し付けられてデリヴァティブに投資し運用を図る企業・個人にとっては、リスク・ヘッジのために、マネーの操作的かつ数理的な概念規定を必要不可欠な条件とする。リスク・ヘッジの技術が、金融工学であろうと経済物理学であろうと(金融工学については、Luenberger, David G., *Investment Science* (Second Edition), Oxford, U.K., Oxford University Press, 2013. を、経済物理学については、青山秀明・家富洋・池田裕一・相馬亘・藤原義久『経済物理学』、共立出版、2008年を参照)、イスラーム金融であろうとそうでなかろうと、ことの本質は変わらない。

そこでマネーをめぐるイスラーム社会の抱えもつ困難な課題が顔を覗かせる。たしかにイスラーム社会においても、ウマイヤ朝第5代カリフの時期(ヒジュラ暦75-76年、西暦695年)に銀貨(ディルハム貨幣)が鑄造され、数百年間用いられたことが知られている。だが、ディルハム銀貨は近代貨幣ではなく、況んやわれわれが対象としているグローバル金融市場における信用創造を可能にする厖大非可算な資本としてのマネーではない。ならば、イスラーム金融は十全な経済学的マネー概念を有しているのだろうか？ 答えは否、である。そのこと表れるのが、金融デリヴァティブの分野なのである。イスラーム金融におけるデリヴァティブを正面から問題化して取り組んでいる諸著作の最良の一冊と言える、クレシーらの『イスラーム金融における金融工学：前進の途、シャリーア適格デリヴァティブ研究』では、「シャリーア研究者

」すなわちイスラーム法学=神学者による「シャリーア・パースペクティブ」に見合った「シャリーア適格」という表現が、実に36箇所(副題を除く)も出てくるが、その内実を保証するのは、スタンダード・アンド・プアーズ社やムーディーズ社といった格付け会社が指定する「シャリーア適格デリヴァティブ」なのである(Kureshi, Hussain, Mohsin Hayat & Septia Iriani Mukhsia, *Financial Engineering in Islamic Finance: The Way Forward, A Case for Shariah Compliant Derivatives*, Singapore, Partridge, 2015.)。

つまり、イスラーム金融の本性に内在的な方法論が究明されてきたのではなく、法学=神学的言説における概念化に携わる、実務経験はともかく、学的次元でこれまでの諸潮流経済学や経済学批判の理論に関する知見が乏しい論者たちによって議論が主になされており、つねに現実に生起する諸問題との齟齬を孕んでいるということである(Ayoub, Sherif, *Derivatives in Islamic Finance: Examining the Market Risk Management Framework*, Edinburgh, U.K., Edinburgh University Press, 2014, p.161 f.)。

ここに言う諸問題は、イスラーム金融であるか否かを問わず、グローバル金融資本主義における架空資本の自己増殖運動(厖大なマネーの無限増殖)にこそ存するのであり、経済の〈外部〉に金融に関わる言説が措かれるのはあくまで戒律的な理由以上のものではない。

上記の事情を総合的に考えると、イスラーム金融は、グローバル・システムの単一性が均質ではないように機能する点で、みごとに欧米型システムとの間に相補性を構築してきていると言わざるをえない。

近年欧米を中心に出版された一連のイスラーム金融をめぐる文献について、もう少しだけ述べておきたい。それらの出版物は基本的に二種類に分けられる。

第一に、イスラーム金融を「利子を生まない銀行システム」を軸としてとらえた上で「西洋型金融システム改革のためのオルタナティブ」と称揚したり(Kuhn, Michelle, *Islamic Banking: Das zinslose Bankmodell als Alternative zur ökonomischen Reformierung westlicher Finanzstrukturen*, Hamburg, Diplomica Verlag GmbH, 2015.)、利子を生むことなく投機を抑制する「倫理的に公正な金融システム」とみなすものである(Mansouri, *Islamic Banking: Das ethisch korrekte Finanzsystem ohne Zinsen und Spekulationsgeschäfte*, Hamburg, Diplomica Verlag, 2013.; Alrif, Tariq, *Islamic Finance and the New Financial System: An Ethical Approach to Preventing Future Financial Crisis*, Singapore, John Wiley & Sons, 2015. etc.)。この亜種には、決済時

においてもたらされる利子をシェアするのでリバー禁止に適格であるだけでなく、歴大な利子が貧しい者たちに分け与えられることで善行へと悪が転化すると主張する、「シェアリング・エコノミー」の風潮に乗った論説も存在する (Iqbal, Munawar, & David T. Llewellyn (eds.), *Islamic Banking and Finance: New Perspective on Profit-Sharing and Risk*, Cheltenham, U.K., Edward Elgar Publishing, 2002. ただしこの論集は2000年代後半の金融危機以前に編まれたものである点に注意を払わなければならない)。この傾向は同時に、決済から逆算して理屈をたてるという質を有しているが、それは歴大なマネーの運動の圧力によって一見可能なものと錯視される「通貨主義」的な逆立ちしたパースペクティブに含められるべきものにほかならない。言葉を換えれば、現実を否認し、あたかも利子を流産させているかのような解釈で世界を切り取らんとする観念論が、この第一のものと言っても差し支えない。

第二のものは、きわめて実務的な問題設定の下でシャリーア適格な金融テクノロジーの方向を追求するものであり、前述のネザーコットのものははじめとした多数の書が世に出回っている (Ayoub, Sherif, *op. cit.*; Askari, Hosseain, Zamir Iqbal & Abbas Mirakhor, *Globalization & Islamic Finance: Convergence, Prospects, & Challenges*, Singapore, John Wiley & Sons (Asia), 2010.; El-Gamal, Mahmoud, *Islamic Finance: Law, Economics, and Practice*, Cambridge, U.K., 2006. Et cetra.)。いずれもがグローバル金融市場の変容過程と質的変態とを明確に意識している点で、上記の第一のものに看取される感情的なバイアスの内容をはるかに凌駕する質と内容とを備えている。さらに、イスラーム金融を資本主義の〈外部〉に措定するようなイデオロギー的論調が意識的に排除されていることは、十二分の評価に値しよう。

だがしかし、そのいずれもが、資本主義システム、より正確には架空資本の支配的運動によって人間を圧倒する利子が生み出されるシステムとメカニズムへの批判を考察の対象としない点で共通の根を有している。これらの文献の著者・論者たちは明言しないが、その研究・探求の結実たる書籍の群れが語り示しているのは、イスラーム金融がグローバル金融資本主義への批判・オルタナティブとして存在するのではないという事実である。さらに詳しく言えば、イスラーム金融は資本主義へのオルタナティブでないばかりか、その逆に、グローバル金融資本主義を洗練させ延命させる機能とその根幹に保持することで、欧米のみでは成し遂げられないグローバル金融市場における架空資本の運動の相対的安定性に寄与している。つまりは、総体として貧困と絶望へと雪崩をうって動いているこの世界において、貧困と絶望に苛まれる「現在奴隷制」を廃絶する力能の創出へと向かわず、イスラーム金融を思うさま扱えるイスラーム社会の支配階級はその支配を満喫できるわけなのだ。

以上から考えると、イスラーム経済——イスラーム金融に「思い入れた」種々の議論やイスラーム金融の「安定性・先進性」の理論探求は、利子生み資本形態をとる歴大な架空資本の運動に対して現実資本を対置する、ある種の倫理主義的批判、あるいは現状追認にすぎない。それゆえ、資本主義に対するイスラーム金融擁護者の「批判」は、無力で不毛なものにならざるを得ないのである。